

新野緑 (Midori NIINO)

履歴・研究業績



I. 履歴

1. 学歴

- 1979年 3月 神戸女学院大学文学部英文学科卒業
- 1979年 4月 神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程入学
- 1981年 3月 神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了
- 1981年 4月 大阪大学文学部研究生入学
- 1982年 3月 大阪大学文学部研究生退学
- 1982年 4月 大阪大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程前期課程入学
- 1984年 3月 大阪大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程前期課程修了
- 1984年 4月 大阪大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程後期課程入学
- 1986年 4月 大阪大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程後期課程退学
- 1994年 4月 英国オックスフォード大学にて在外研究 (～1995年 3月)
- 2002年 2月 大阪大学博士 (文学) 取得

2. 職歴

- 1986年 5月 大阪大学文学部助手
1987年 3月 大阪大学文学部助手退職
1987年 4月 神戸市外国語大学外国語学部英米学科専任講師
1990年 4月 神戸市外国語大学外国語学部英米学科助教授
2000年 4月 神戸市外国語大学外国語学部英米学科教授
2013年 4月～2015年 3月 神戸市外国語大学学務担当理事・学生支援部長
2022年 3月 神戸市外国語大学外国語学部英米学科定年退職
2022年 4月 神戸市外国語大学名誉教授
2022年 4月 ノートルダム清心女子大学文学部英語英米学科教授
現在に至る

II. 主要業績

1. 編著書

- (1) 『小説の迷宮—ディケンズ後期小説を読む』 研究社、2002年（単著）
- (2) 『<異界>を創造する—英米文学におけるジャンルの変奏—』 阪大英文学会叢書3 英宝社、2006年（共編著）
- (3) 『<私>語りの文学—イギリス十九世紀小説と自己』 英宝社、2012年（単著）
- (4) *Dickens in Japan: Bicentenary Essays*. 大阪教育図書、2013年（共編著）
- (5) 『言葉という謎—英米文学・文化のアポリア』 大阪教育図書、2017年（共編著）

2. 論文（すべて単著）

A. 学位論文

- (1) 「時間・テキスト・主体—ディケンズ後期小説の構造」（大阪大学提出）2002年2月学位取得

B. 単行本所収論文

- (1) 『『大いなる遺産』の空間構造』 藤井治彦編『空間と英米文学』（英宝社）1987年 115-40.
- (2) 「労働・娯楽・教育—ディケンズ『辛い時代』における「民衆」—」 松村昌家・川本静子・長島伸一・村岡健次編『民衆の文化誌』 講座・英国文化の世紀 第四巻（研究社）1995年 185-202.
- (3) 「震える「自己」—ピップの主体と物語—」 松村昌家編『チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』—読みと解釈—』（英宝社）1998年 283-322.
- (4) 『『ドンビー父子商会』—時間・ジェンダー・セクシュアリティ』 内田能嗣編『ヴ

- ィクトリア朝の小説—女性と結婚』（英宝社）1999年 119-46（Cの（10）の日本語訳）。
- (5) 「視線の迷宮—『リトル・ドリット』における「見ること」と主体」松村昌家教授古稀記念論文集刊行会『ヴィクトリア朝—文学・文化・歴史—』（英宝社）1999年 454-71.
- (6) 「『荒涼館』における時間・テクスト・主体—エスタの語りを中心に—」『藤井治彦先生退官記念論文集』（英宝社）2000年 507-29.
- (7) 「19世紀ロンドンを歩く—チャールズ・ディケンズの『迷子になって』」御輿哲也編『移動の風景—英米文学・文化のエスキス』（世界思想社）2007年 10-33.
- (8) 「自己—書く「自己」／読む「自己」」松岡光治編『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化』（溪水社）2007年 293-310.
- (9) 「ディケンズ『荒涼館』」千葉一幹・芳川泰久編『名作はこのように始まる I』ミネルヴァ評論叢書＜文学の在り処＞別巻1（ミネルヴァ書房）2008年 104-14.
- (10) 「『デイヴィッド・コパフィールド』の深淵—結婚・家庭崇拜・セクシュアリティ」『英米文学の可能性—玉井暲教授退職記念論文集』（英宝社）2010年 389-400.
- (11) 「自己—「自伝」とその虚構化をめぐる」松岡光治編『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』（溪水社）2010年 497-515.
- (12) 「W. M. サッカレー—自伝性と匿名性をめぐって—」岩上はる子、惣谷美智子編『ブロンテ姉妹と15人の男たちの肖像—作家をめぐる人間ドラマ』（ミネルヴァ書房）2015年 133-52.
- (13) “The Belly of London: Dickens and Markets,” *London and Literature: 1603-1901*. Cambridge Scholars Publishing, 2017. Barnaby Ralph, Angela Kikue Davenport and Yui Nakatsuma eds. 95-110.
- (14) 「マナーの語るもの—『説得』における階級・認識・主体」『ジェイン・オースティン研究の今—同時代のテクストも視野に入れて』日本オースティン協会編（彩流社）2017年 89-105.
- (15) 第10章「ディケンズとの対話—『三文文士』におけるリアリズムと商業主義」松岡光治編『ディケンズとギッシング—底流をなすものと以って非なるもの』（彩流社）2018年12月 171-86.
- (16) 第1章「『ジェイン・エア』と『デイヴィッド・コパフィールド』—創作のプロセスを語る自己形成の物語—」岩上はる子、惣谷美智子編『めぐりあうテクストたち—ブロンテ文学の遺産と影響』（春風社）2019年 15-31.

C. 定期刊行物所収論文

- (1) 「『荒涼館』における時間構造」 *The Edgewood Review* 第 8 号（神戸女学院大学大学院）1981 年 57-74.
- (2) 「*Bleak House* の空間—Lady Dedlock を中心として—」 *Osaka Literary Review* 第 21 号（大阪大学大学院英文学談話会）1982 年 62-74.
- (3) 「二つの円環—*Hard Times* の空間構造—」 *Osaka Literary Review* 第 23 号（大阪大学大学院英文学談話会）1984 年 78-91.
- (4) 「*Little Dorrit* における「闇」と「光」」 *The Edgewood Review* 第 12 号（神戸女学院大学大学院）1985 年 27-40.
- (5) 「流動する闇—*A Tale of Two Cities* の空間」『待兼山論叢』第 20 号（大阪大学文学会）1986 年 3-19.
- (6) 「Dickens における「表層」の裏面—*Our Mutual Friend* をめぐって—」『神戸外大論叢』第 40 巻第 7 号（神戸市外国語大学研究会）1989 年 51-67.
- (7) 「動揺する物語世界—*A Tale of Two Cities* におけるエクリチュール」『神戸外大論叢』第 41 巻第 6 号（神戸市外国語大学研究会）1990 年 27-41.
- (8) 「Fabricating History—*Hard Times* における「虚構」と「現実」—」『英語青年』第 137 巻第 3 号（研究社）1991 年 118-22.
- (9) 「*David Copperfield* におけるロマンスの構築あるいは解体」『英文学研究』第 68 巻第 1 号（日本英文学会）1991 年 61-73.
- (10) "Gender, Sexuality and Time in *Dombey and Son*" 『神戸外大論叢』第 46 巻第 1 号（神戸市外国語大学研究会）1995 年 49-76.
- (11) 「時間・テキスト・主体—『荒涼館』における「読むこと」—」『神戸外大論叢』第 48 巻第 7 号（神戸市外国語大学研究会）1997 年 1-22.
- (12) 「三人のガヴァネス—ベッキー・シャープ、ジェイン・エア、アグネス・グレイ」『神戸外大論叢』第 50 巻第 7 号（神戸市外国語大学研究会）1999 年 25-56.
- (13) 「「見ること」の探求—『リトル・ドリット』における二人の主人公—」『英国小説研究』第 20 冊（英潮社）2001 年 139-64.
- (14) 「空白の語るもの—『アグネス・グレイ』におけるジェンダーと語り—」『神戸外大論叢』第 52 巻第 2 号（神戸市外国語大学研究会）2001 年 15-40.
- (15) 「Alexander Welsh のディケンズ批評」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第 26 号（ディケンズ・フェロウシップ日本支部）2003 年 121-31.
- (16) 「反復の恐怖—ディケンズ「信号手」を読む」『文学』第 5 巻第 6 号（岩波書店）2004 年 171-87.
- (17) 「分裂と融合—『二都物語』の表象構造」『英語青年』第 152 巻第 2 号（研究社）2005 年 74-75.

- (18) 「テキスト分析とその「外部」—ディケンズ批評と二人のミラー—」『英語青年』第 153 巻第 1 号（研究社）2007 年 5-7.
- (19) 「「笑う」ヒロイン——『エマ』における言葉・マナー・認識」『英国小説研究』第 23 冊（英潮社フェニックス）2008 年 53-80.
- (20) 「ニューゲイト・ノヴェルのゆくえ—ディケンズ、サッカレイとライフ・ライティング」『神戸外大論叢』第 59 巻 6 号（神戸市外国語大学研究会）2008 年 10 月 25-49.
- (21) 「「知ること」の不幸—エリオット「引き上げられたヴェール」とディケンズの短編小説」『神戸外大論叢』第 60 巻 5 号（神戸市外国語大学研究会）2009 年 11 月 39-60.
- (22) 「Jane Austen と邸宅—*Northanger Abbey*, *Pride and Prejudice*, *Mansfield Park* における社会意識とアイロニー」『ジェイン・オースティン研究』第 8 号（日本ジェイン・オースティン協会）2014 年 1-22.
- (23) 「都市型作家の誕生—『骨董屋』に見るディケンズの自己形成」『英国小説研究』第 25 冊（英宝社）2015 年 5 月 28-55.
- (24) 「ジョージ・エリオットと〈一人称語り〉—「エイモス・バートン師の悲運」を中心に」『英国小説研究』第 28 冊（英宝社）2021 年 4 月 29-47.

3. その他の研究活動

A. 口頭発表

- (1) 「*Great Expectations* の空間構造」ディケンズ・フェロウシップ春季大会 於甲南女子大学 1986 年 6 月.
- (2) 「*David Copperfield* におけるロマンスの構築あるいは解体」日本英文学会全国大会 於岡山大学 1990 年 5 月.
- (3) 「動揺する物語世界」ディケンズ・フェロウシップ春季大会シンポジウム「*A Tale of Two Cities* をめぐって」のパネラーとして（司会：小池滋 講師：植木研介、山本史郎）於広島大学 1990 年 6 月.
- (4) 「*Bleak House* における「読むこと」—時間・テキスト・主体—」ディケンズ・フェロウシップ秋季大会 於東京女子大学 1996 年 10 月.
- (5) 「空白の語るもの—『アグネス・グレイ』におけるジェンダーと語り」日本ブロンテ協会 2000 年大会シンポジウム「『アグネス・グレイ』を読む」のパネラーとして（司会/発題：玉井暲 発題：嶋公代）於同志社大学 2000 年 10 月.
- (6) 「Alexander Welsh のディケンズ批評」ディケンズ・フェロウシップ春季大会シンポジウム「80 年代以降のディケンズ批評」のパネラーとして（司会/講師：村山敏勝 講師：玉井史絵）於弘前大学 2003 年 6 月.

- (7) 「イギリス小説の演習」阪大英文学会第 39 回大会シンポジウム「英米文学の演習・英語学の演習」のパネラーとして（司会／講師：新野緑 講師：川島伸博、片淵悦久、岡田禎之）於大阪大学 2006 年 11 月.
- (8) 「ディケンズと結婚—*David Copperfield* を中心に」テクスト研究学会第 7 回大会シンポジウム「結婚しようよ—オースティン、ディケンズ、ロレンスそしてラドクリフ・ホール」のパネラーとして（司会／講師：富山太佳夫 講師：中村裕子、武藤浩史）於青山学院大学 2007 年 8 月.
- (9) 「Life-writing と犯罪世界」日本英文学会第 80 回大会シンポジウム「ライフ・ライティングの虚実—人物造形と歴史記述の多様性」のパネラーとして（司会／講師：小林章夫 講師：干井洋一、金子幸男）於広島大学 2008 年 5 月 24 日.
- (10) 「「知ること」の不幸—George Eliot と Charles Dickens」日本ジョージ・エリオット協会第 12 回大会シンポジウム「短編作家としてのジョージ・エリオット」のパネラーとして（司会：廣野由美子 講師：泉忠司、池園宏）於近畿大学 2008 年 11 月 29 日.
- (11) 「ジェイン・オースティンと邸宅」神戸女学院大学英米学会講演 於神戸女学院大学 2012 年 11 月 30 日.
- (12) 「*The Old Curiosity Shop* に見る記憶の変容—Dickens の自己形成—」日本英文学会第 85 回全国大会招待発表 東北大学 2013 年 5 月 26 日.
- (13) 「ロンドンの胃袋—ディケンズと市場」ディケンズ・フェロウシップ日本支部秋季総会講演 於中央大学駿河台記念館 2016 年 10 月 8 日.
- (14) 「藤井先生のご講義と『思想としての空間』」阪大英文学会第 50 回大会「シンポジウム・藤井治彦」のパネラーとして（司会：服部典之 講師：渡辺克昭、大森文子、川嶋伸博、足立賀代子）於大阪大学 2017 年 10 月 28 日.
- (15) 「ジョージ・エリオットと〈一人称語り〉—「エイモス・パートン師の悲運」を中心に」日本ジョージ・エリオット協会第 23 回大会 於松蔭大学 2019 年 12 月 14 日.
- (16) 「歴史と文学の接点を探る—松村昌家先生のディケンズ研究」日本比較文学会関西支部 2021 年度 9 月例会シンポジウム「比較文学研究の拡張と刷新—松村先生追悼記念シンポジウム」（司会：森道子 講師：橋本順光 井上健）ズーム開催 2021 年 9 月 18 日.
- (17) 「〈見誤り〉の悲喜劇—*Emma* と *Middlemarch*—」日本ジョージ・エリオット協会第 24 回全国大会（日本オースティン協会共催）シンポジウム「Jane Austen と George Eliot 「深遠なる重要性を帯びた影響」—その探究の魅惑」ズーム開催（司会：惣谷美智子 講師：川津雅江、土井良子、永井容子）2021 年 12 月 18 日.

B. 書評（すべて単著）

- (1) Alexander Welsh, *From Copyright to Copperfield* 『英文学研究』第 66 巻第 1 号（日本英文学会）1989 年 138-43.
- (2) Patricia Ingham, *Dickens, Women and Language* 『英語青年』第 139 第 3 号（研究社）1993 年 141-43.
- (3) Jeff Nunokawa: *The Afterlife of Property* 『英語青年』第 140 号第 8 号（研究社）1994 年 408-409
- (4) Patricia MacKee, *Public and Private: Gender, Class, and the British Novel(1764-1878) The Browser No.97* (大阪洋書) 1998 年 6-10.
- (5) Laura Peters, *Orphan Texts: Victorian Orphans, Culture and Empire* 『英語青年』第 147 巻第 3 号（研究社）2001 年 190-91.
- (6) Michael Slater ed., *'Gone Astray' and Other Papers from Household Words 1851-59. The Dent Uniform Edition of Dickens' Journalism Vol. III* 『英文学研究』第 78 巻第 1 号（日本英文学会）2001 年 56-60.
- (7) 谷田博幸『極北の迷宮 北極探検とヴィクトリア朝文化』『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第 25 号（ディケンズ・フェロウシップ日本支部）2002 年 104-108.
- (8) Catherine Gallagher, *The Body Economic: Life, Death and Sensation in Political Economy and the Victorian Novel* 『ヴィクトリア朝文化研究』第 4 号（日本ヴィクトリア朝文化研究学会）2006 年 79-82.
- (9) 田中孝信『ディケンズのジェンダー観の変遷—中心と周縁とのせめぎ合い—』『英語青年』第 152 巻第 11 号（研究社）2007 年 690-91.
- (10) 自己の在処 : Alexander Welsh, *Dickens Redressed: The Art of Bleak House and Hard Times* 『関西英文学研究』第 1 号（日本英文学会関西支部）2007 年 137-43.
- (11) 荻野昌利『小説空間をく読む—ジョージ・エリオットとヘンリー・ジェイムズ—』『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第 32 号（ディケンズ・フェロウシップ日本支部）2009 年 33-38.

C. 翻訳

- (1) V.T.J.アークル『イギリスの社会と文化 200 年の歩み』松村昌家、森道子、島津展子との共訳（英宝社）2002 年.
- (2) ヘンリー・メイヒュー『ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会』松村昌家との共編訳（ミネルヴァ書房）2009 年.

- (3) エイサ・ブリッグズ『ヴィクトリア朝のもの』玉井暲、米本弘一監訳 共訳（国土社）2020年.

D. 辞典

- (1) 「ディケンズ主要文献解題/索引」松村昌家編『ディケンズ小事典』（研究社）1994年 186-49.
- (2) 『ロンドン事典』蛭川久康、櫻庭信之、定松正、松村昌家、P. スノードン編（大修館書店）2002年 “Fogs”の他 25項目担当.
- (3) 『『デイヴィッド・コパフィールド』』西條隆雄、植木研介、原英一、佐々木徹、松岡光治編『ディケンズ鑑賞大事典』（南雲堂）2007年 235-55.

E. その他

- (1) 「小説研究と『自己』」『日本ヴィクトリア朝文化研究学会ニュースレター』第7号（日本ヴィクトリア朝文化研究学会）2008年 4.
- (2) 「Life-writing と犯罪世界」『日本英文学会第80回大会プロシーディングズ』2008年9月 134-36.
- (3) 「*The Old Curiosity Shop* に見る記憶の変容—Dickens の自己形成」『日本英文学会第85回プロシーディングズ』2013年9月 37-38.
- (4) 「自伝の魅力」『マーク・トウェイン研究と批評』第12号（マーク・トウェイン協会）2013年.
- (5) 「ディケンズとトウェイン」『マーク・トウェイン研究と批評』第15号（マーク・トウェイン協会）2016年.
- (6) 「藤井先生のご講義と『思想としての空間』」*OLR* 第57号 大阪大学英文学会 2019年1月 87-93.
- (7) 「新野緑のこの一冊—『荒涼館』（チャールズ・ディケンズ著）」『週刊読書人』2019年5月.
- (8) 「ディケンズと同時代の作家たち」『年報』42号巻頭言 ディケンズ・フェロウシップ日本支部 2019年12月.

III. 学会活動

1. 所属学会

日本英文学会、ディケンズ・フェロウシップ日本支部、日本ジョージ・エリオット協会、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、日本オースティン協会

2. 学会役員

日本ヴィクトリア朝文化研究学会編集委員（2002年11月～2007年10月）
ディケンズ・フェロウシップ日本支部理事（2002年10月～2008年10月）
日本英文学会関西支部事務局長・運営委員（2008年12月～2010年12月）
日本英文学会関西支部評議員（2009年12月～2010年12月）
日本英文学会関西支部理事・編集委員（2011年4月～2013年3月）
ディケンズ・フェロウシップ日本支部副支部長・理事・編集委員長（2011年10月～2017年10月）
日本英文学会関西支部理事（2013年4月～2019年3月）
日本英文学会関西支部大会準備委員（2015年4月～2017年3月 2015年度副委員長、2016年度委員長）
日本英文学会関西支部支部長（2017年4月～2021年3月）
日本英文学会本部理事（2017年5月～2021年5月）
ディケンズ・フェロウシップ日本支部支部長（2017年10月～2020年10月）
日本ジョージ・エリオット協会編集委員（2021年12月～現在に至る）